

氏名	吉田 晋之介
ヨミガナ	ヨシダ シンノスケ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第541号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 Days - 持続変化と不変項 〈作品〉 プール XI Days II グレア 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	秋本貴透
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	佐藤 道信
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	小林 正人
(副査)	金沢美術工芸大学	教授	()	佐藤 一郎
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	O J U N
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

眼前に広がる、日々刻々と移りゆくこの世界と対峙し、その中で生きながら思考する私の興味関心は、目に見えるものの変化の速さに同調しているのかしていないのか。私は自身の制作動機に対し、深く掘り下げる時間と、研ぎ澄まして一つの光に向かって突き進んでいくような信念を保つことができない。然らば私は今後、どのような動機で、何を拠り所に制作をしていけばいいのか。そもそも私は、なぜ制作をするのか。

本論は、画家である筆者が制作心得として焦点を当てている「持続変化と不変項」を主題として設定し、筆者の思考体系に最も影響を与えた生態心理学からの示唆を通して考察される、絵画の制作論である。

本論の表題にある「Days」とは、筆者が2015年に開催した個展のタイトルでもある。「日々を過ごし、日々絵を描く」という意味を込めた。複数形であることが重要で、日々それぞれその時に感じたものを、たとえ行き当たりばったりにも絵画に保存していき、そうしてできた一見バラバラの興味で描かれた作品たちを後で並べて見返した時に初めて、それらの作品の何らかの共通項の中から自分の興味の本質が見えてくるのではないか、というねらいを個展という形で表現した。制作に対し一貫するテーマを最初にあらかじめ自ら設け、それを拠り所として制作していくことに対して異を唱えるものであった。

本論も基本的にはこの概念のもとに展開される。「Days - 持続変化と不変項」にある単語はそれぞれ、「Days」は「日々」を、「持続変化」は「持続的に変化し続けようとする」と、そして「不変項」は生態心理学の用語で「変わらないもの、本質、本性、個性」を指す。したがって、「Days - 持続変化と不変項」には、「日々変わり続けるからこそ、その変遷の中にある変わらないものを知ることができる」という意

味合いが込められている。これは筆者の画家としての理念であり、本論はこの理念に導かれた制作の方法論を探る試みである。

画家が論文を書く。このことにはどのような意義があるのだろうか。「自らの制作の方法論を強固に裏付けていくことは、今後の制作の自由度を抑止してしまうことなのではないか」。本論の主題はこうした素朴な疑問から生まれた。したがって本論は、これまでの制作や制作動機について纏めた総集編的な制作論ではなく、これから死ぬまでの永い間の制作にも適用できるような、持続的な制作のための制作論の成立を目指した。

「今日の非常識は明日の常識となる」。この現代のスピード感の中で、「持続可能な」制作動機を探ること。自ら綴った論説に縛られることのない、自由な制作のための制作論として成立させること。そして矛盾するようだが、それを論説として記述すること。これが本論の目的である。

本論は、全4章と結論という構成である。

第1章では、現在の筆者の制作に対する考え方やスタンスに至る契機となった震災の一連の記憶と、筆者の思考体系に最も影響を与えることとなった生態心理学との結びつきによって起きた、制作に対する考え方の変遷を述べた。地震から始まった、自身の現実認識の瓦解とそれに伴う制作動機の喪失を、再構築するに際してなぜ生態心理学を参照するに至ったのかについて、順を追って述べた。

第2章では、生態心理学の書籍から、絵画制作や本論の主題に対して重要な示唆となるものを紹介した。そのなかでも生態心理学の「不変項」という概念は、本論において非常に重要視される。

第3章からは「制作論」とし、まず本論における画家と絵画を定義づけた。そのうえで絵画が「描かれる理由」を、そして「描く理由のために環境を考察」する理由を述べた。そして「環境考」へと繋がる。そこでは現代画家をとりまく環境を「現実風景」「インターネット」「他者」「絵画史」「身体」「自作品」と分け、それぞれ詳細に論じた。第5節では、「環境に動かされ、制作の拠り所も環境にあるとなると、私とはなんなのか。そして私はなぜ絵画で表現するのか。」という問題提起がなされ、宮沢賢治の詩集『春と修羅・序』の解釈や、押井守のインタビューを手がかりとし、「私とは何か」や「なぜ絵画なのか」を考察した。

第4章は「東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展2016」で展示した、提出作品3点についてのそれぞれの解説である。

結論では、冒頭で立てられた問いに対する所論が、これまでの考察を通して論じられる。本論があきらかにしたことは、画家は、その置かれている周りの環境によって持続的に、そして積極的に変化しようとするべきである、ということである。

本論は制作論として、画家は自身の「本質／本性／個性／不変項」を自ら設定したり、語ったり、それを拠り所に制作をするべきではないということを主張する。画家の不変項とは、画家が変化するからこそ見えてくるものであり、その変化は予測不能な環境に準じ、そしてその変化は永遠に持続するものである。環境とはルールである。ルールから発想が生まれる。変わり続けるルールの本質を捕捉するためには、自らも変わり続け、色々な面から環境を見ようとしなければならない。

そうして変化し続けながら描かれた絵画は、並べられることによって、結果的に多面鏡のように画家本人の不変項を映し出す。

画家の知覚システムは、その画家がそれまでどのような環境と接触してきたかによって、全く個性的に構築されてきた。画家は、その個性的な知覚システムを用いて、自作品や自分自身の変化を多面的に眺め、自らの不変項を把握しようとする事ができる。

そして筆者は、そうして見えてきた自分自身の不変項へ反発する。把握できそうな自分の不変項に対して、疑いの姿勢を持ち続ける。その姿勢は表現活動における大きな原動力となり、持続可能な制作動機となるだろう。新しいものを見たいという人間の根源的な欲求を満たすためには、自身の持続的で積極的な変化が必要不可欠なのである。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、日々 (Days) 変わり続ける環境 (持続変化) の中で、変わらないもの (不変項) を追求しようとする筆者の姿勢を、生態心理学の概念を援用して考察したものである。

筆者は、現時点での本論考が「これまでの制作の方法論を強固に裏づけ」、「今後の制作の自由度を抑止してしまう」ことに、“恐れ”に近い危惧を抱いている。そこで「自分に前言撤回されない」ための自己説得として、冒頭の論理を考え出したのだが、ここでは「不変項」をめざすことと、「持続可能な制作動機」を探ることが、ほぼ等価に論じられている。この筆者の“恐れ”の背景には、高速度で状況が変わる情報社会と、価値観が一変してしまった東日本大震災の衝撃があるらしい。

第1章「現実認識」では、まずその大震災の衝撃、それによって作品が「自然環境の中の人工造営物」(ダムなど)から、瓦礫が浮遊する作品に一変したこと。ここで、「環境は制作に作用し、環境に存在する情報が制作活動を決定づけている」ことに気づいたこと。それによって初めて、2年前にすでに読んでいた生態心理学の「アフォーダンス理論」(J. J. ギブソン)が、現実とつながったことを述べる。第2章「生態心理学からの示唆を受けて」では、環境と知覚と知己のシステムについて、我々はずねに変化する環境を五感で知覚しながら自己も認識していることを、スウィング・ルームの実験などから説明する。ただ変化を知覚しながら、人は同時に「不変項」をそこに探索しようとしていること。ここから筆者が、「ものの本質は、変化の中でしか知りえない」という、画家の制作動機に関する重要な示唆を得たことを述べる。そして第3章「制作論」では、画家にとっての「環境」として、現実風景、インターネット、他者、歴史、身体、鏡としての自作品をあげ、そうした「環境」との関係で制作が変化すること。そこでの「不変項」が、画家の“個性”になることを述べる。最後に第4章「提出作品について」で、「グレア」「Days II」「プールXI」の3点を解説している。

論考の大部分は、「画家」にとっての「環境」と、そこでの「持続変化」「不変項」についてであり、自身は「環境」の一部として、正面から自身を論じることを避けている。冒頭の理由ゆえだが、審査会でも批判が出たようにこの点には不満が残る。ただ一方で、生態心理学の理論を援用した論証の構成、論述、分析は的確で、文章も明快で読みやすい。アフォーダンス理論は多方面に大きな影響を与えた理論であり、本論文が論じた内容も、画家(絵画)にとどまらない創作、表現論として説得力をもつとも言える。学位論文として十分な内容として、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

吉田晋之介はインターネット時代の画家らしくSNSの情報、様々なネット上のアイコンをモチーフにしている。口が達者だし弁もたつ。自分より遥かに大きい大画面に向かう勇敢な多少ドンキホーテ的絵描き魂を持っている点を評価。

今回の作品で面白かったのは(個人的に)画面に指紋が入っている作品。

スマホの指紋の汚れは液晶画面を見えにくくするが、それは情報が多くなると視界が曇るって事だ！クリアに見える世界が徐々に見えづらくなっていく怖さ。。人間が見る事と暮らしに役立つネット上の情報との差異がアイロニカルに洗われて見えてくる点で視覚的な絵画としての可能性を感じた。

全員一致で合格！！

(総合審査結果の要旨)

「今日の非常識は、明日の常識になる」。現代のインターネット社会における情報伝達の圧倒的な速さによって変化し続ける時代を、申請者の吉田晋之介はこの言葉で表している。画家として生き続けようとする未来において、持続可能な制作のための指針を持つことは重要なことである。

2018年度、博士提出論文、「Days - 持続変化と不変更」は全4章と結論で構成され、申請者が思考体系に最も影響を受けた生態心理学のアフォーダンス理論から制作に与える動機や意義、そして制作における持続変化と不変項の価値が、絵画の制作論としてまとめあげられている。

また博士提出作品は、270cm×270cmのキャンバスに油絵具で制作された絵画、「グレア」、「Days II」、「プールXI」の3作品であり、それぞれ異なる絵画表現がおこなわれている。「グレア」は、重層的な層構造で綿密に計画的に制作され、「Days II」は、衝動的に油絵具と筆による流動性を生かし、アラプリマ技法のように制作され、「プールXI」は、マスキングによってフラットで鋭角な構造によって制作されている。

「日々変わり続けるからこそ、その変遷の中にある、変わらないものを知ることが出来る」という理念に導かれた博士論文による制作の方法論が実践されている。

博士論文の中で画家にとっての環境について、無限に得られるためのモチーフであること、そしてルール、制約があるからこそ発想が生まれ、柔軟な制作が出来ることが述べられている。変わり続ける環境だからこそ、自身も変わり続ける。自身が変わり続けなければ、環境も変わらない止まったものになる。変わらない自分がまず存在しているのではなく、変わり続けるからこそ自分の存在が現れる。画家として自身の取り巻く環境を主客二元論として捉えるのではなく一体であるという自覚をもつこと。環境という変化している動きを止めてみたり、視点を止めるのではなく、止めない動きの中に自分も内在されつつ動いていくようにして、主体も客体もない経験や体感が世界の動きの認識になる。環境が作品を生み、作品が新たな環境となり、画家はその無限ともいえる繰り返しをし続ける。平成23年3月11日の東日本大震災での大きな揺れや見えない放射能の不安が生態心理学と繋がる起点になったとするなら、画家にとっての環境に、風土との関係も考察する必要があったかもしれない。

博士提出論文は、申請者の現実に即した制作論として説得力のある内容となった。また博士提出作品は、現代の情報化社会に切り込んだ意欲的な絵画となっている。論文副査、作品副査からも博士学位として認められる優れた論文、作品として評価を受けた。